

南極は現在の地球環境を監視するセンサーだ！

地球大気の大循環を診断する PANSYレーダー

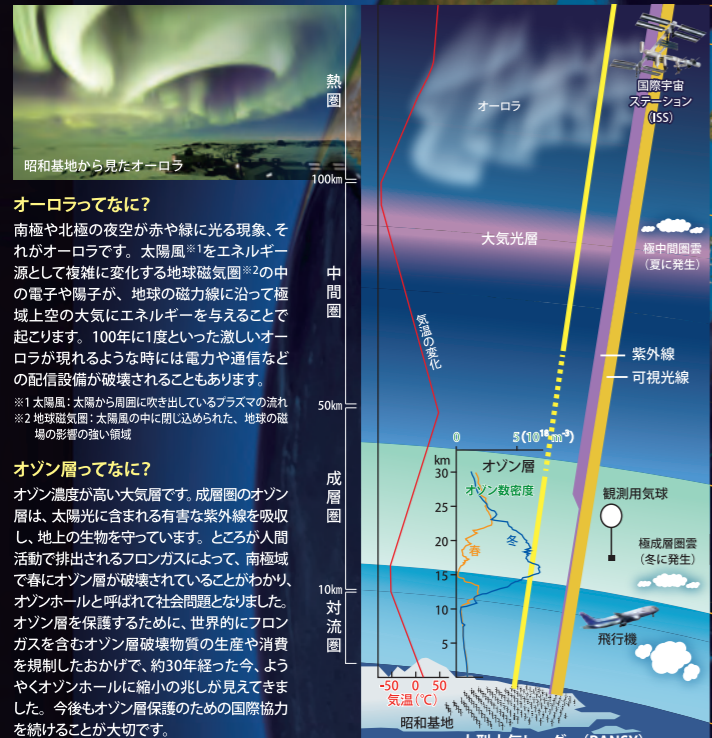
南極では、高度10kmより上の成層圏でオゾンホール、中間圏で極中間圏雲(夜光雲)、さらに上の熱圏でオーロラと、特異な大気現象が多く見られます。高度100kmまでの大気は、上昇・下降を含む地球規模の循環をしており、地球環境に大きく影響しています。この大循環の動きのメカニズムや変化を知る鍵となる南極上空の大気を観測するのが、約1,000本ものアンテナを持った南極昭和基地の大型大気レーダー(PANSY)です。高度1~500kmの、水平風速や鉛直風速、プラズマの温度、密度を詳しく観測できる南極唯一の大型大気レーダーで、気象予報や気候予測モデルの精密化につながる大気変動の仕組みを解明します。



一家に1枚

南極 Antarctica -地球の未来を映す窓-

南極はただ氷に覆われた大地ではありません。そこには地球が46億年前に生まれてからの履歴や現在の地球環境、そして地球や人類の未来を探る材料があふれています。南極から地球を眺めると一体何が見えてくるのでしょうか。人類にとってかけがえのない地球の過去・現在・未来を探る旅にご案内します。

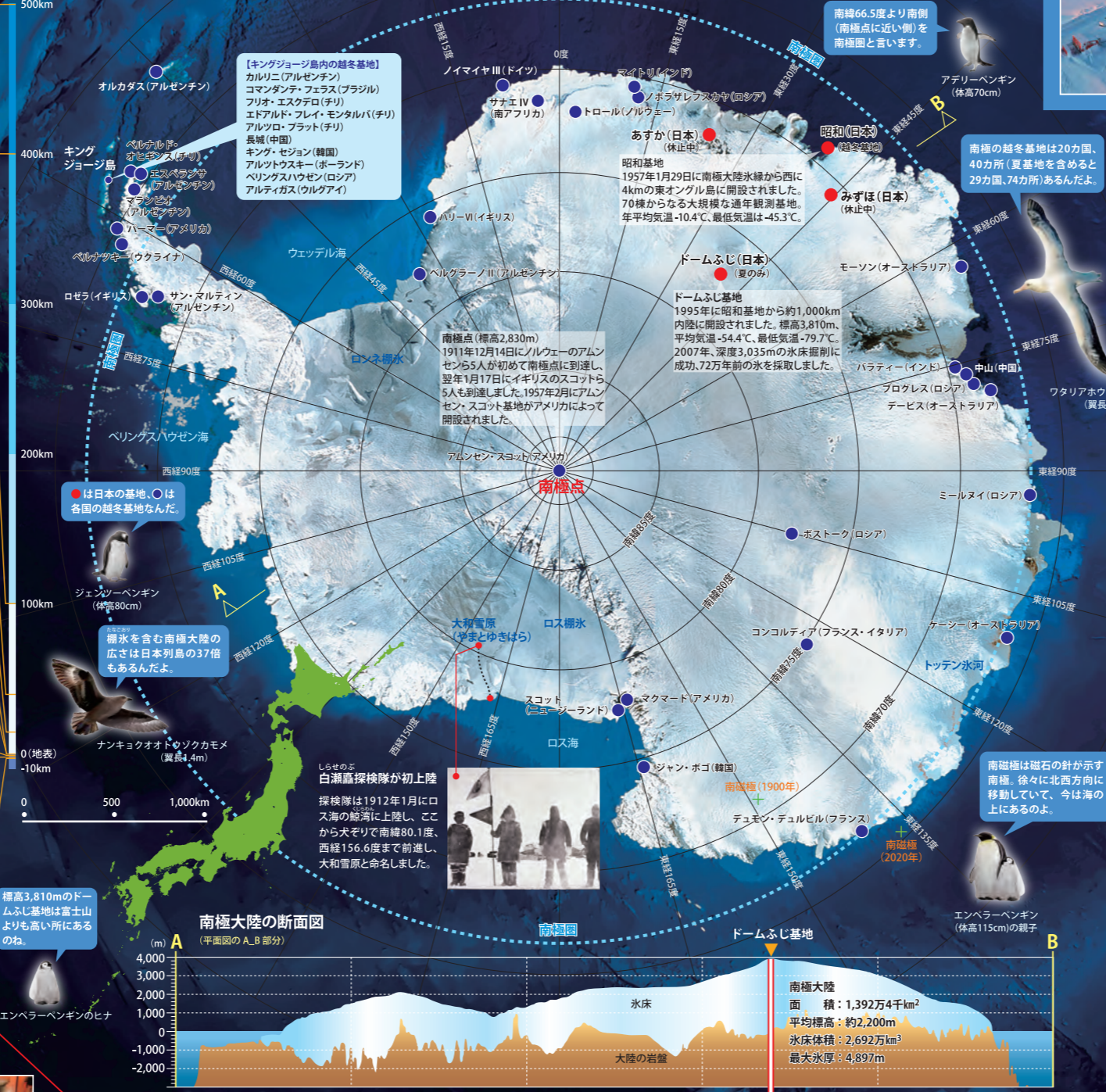


世界で初めてオゾンホールを発見したのは日本の南極観測隊だよ。

地球の過去を保存したタイムカプセル！

46億年前からのメッセージ

南極は地球の過去を保存したタイムカプセルです。南極大陸を分厚く覆う氷床には百万年以上にわたる気候変動が、南極で大量に見つかる隕石には太陽系の起源と生い立ちが、そして氷床下に横たわる岩盤には地球の変動の痕跡が保存されています。地球環境の将来を考える上で、過去の変動のメカニズムを明らかにすることはとても重要です。



現在の南極と国際社会とのかかわり

国際協力と条約で守る氷の大陸
1959年に採択され、1961年に発効した南極条約は、①南極地域の平和的利用(軍事的利用禁止)、②科学的調査の自由と国際協力の促進、③南極地域における領土権、請求権の凍結、④核実験、放射性廃棄物処分の禁止、⑤条約の遵守を確保するための監視制度の設置を定めています。1998年以降、南極条約環境保護議定書で生態系保護や資源採掘禁止が定められました。条約加盟国は54か国であり(2021.現在)、日本は原署名国12か国の一つとして条約を遵守するとともに、南極での国際協力も積極的に進めています。

南極へのアクセス

近年、国際チャーター便による航空網が整備され、南極観測船「しらせ」に先駆けて昭和基地や数百キロも離れた山岳地域へ直航航空機で赴くことが可能になりました。しかし、昭和基地での観測や生活に必要な燃料や食料などの物資の輸送には、「しらせ」による年に1度の輸送が欠かせません。

教育へのかかわり

教員南極派遣プログラムに参加した学校の先生が南極から発信する「南極授業」や、観測隊員が南極の紹介を行う「南極教室」、さらに中高生からのアイデアを観測隊員が極地で実施する「南極・北極科学コンテスト」などを通して、教育とも深く関わっています。

未来の地球環境はどうなるの？

環境の変動が地球にもたらすもの
大気中の二酸化炭素(CO₂)濃度は人間の活動により、これまでにない速度でどんどん増加しています。CO₂の排出量を制限するなどの気候変動対策を取らなかった場合、地球温暖化はさらに進み、80年後の2100年には世界の平均気温が今より4℃近く上昇し、南極やグリーンランドの氷床が大規模に融解して平均海面は最大1m以上上昇、2300年には5m以上も上昇する可能性が指摘されています。海面が上昇すると海抜の低い小さな島国や沿岸域の多くの都市が海に沈むだけでなく、海洋や陸上の生態系も大きく変わってしまいます。また、地球温暖化が進むと巨大な台風やハリケーンなどの極端な気象現象の頻度や規模が拡大することも予想されています。今後、私たちの子孫が生きていける環境を残すことができるかは、現在の私たちの気候変動対策にかかっています。

